甲斐市文化財調査報告書　第28集
（山　梨　県）

御　岳　田　遺　跡　8

都市計画道路田富敷島線道路改良工事に伴う
平安時代等の発掘調査報告書

2018
山梨県中北建設事務所
甲斐市教育委員会

甲斐市文化財調査報告書　第28集（山梨県）
御岳田遺跡8　都市計画道路田富敷島線道路改良工事に伴う平安時代等の発掘調査報告書
2018　甲斐市教育委員会

甲斐市文化財調査報告　第28集
（山　梨　県）

御　岳　田　遺　跡　8

都市計画道路田富敷島線道路改良工事に伴う
平安時代等の発掘調査報告書

2018
山梨県中北建設事務所
甲　斐　市　教　育　委　員　会

序　文

甲斐市は、平成27年に行われた国勢調査の結果、山梨県で唯一人口が増加しているまちです。増加の要因として考えられることは、県都甲府に隣接し、交通の利便性の良いことがあげられるでしょう。そのため、開発によって生じる埋蔵文化財包蔵地の問い合わせも増加の一途をたどっております。

現在、市内には220箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていますが、とくに市中央部の茅ヶ岳南麓や市東部の荒川扇状地に集中しています。この中には、居住域と墓域がセットで発見された弥生時代の「金の尾遺跡」や、山梨県最古の登窯跡である「天狗沢瓦窯跡」など、重要な遺跡が点在しています。これらのことから、山梨県の歴史を学習する上でも注目される地域となっています。

今回報告します「御岳田遺跡」の発掘調査は、甲斐市大下条地内の県道拡幅工事に伴い行われました。調査の結果、調査区の全域が旧河川の流路跡であったことがわかりました。しかし、調査区の一部では川原石に囲まれた中に古墳時代や平安時代の住居跡が建てられていました。「石ばかりの土地に建物を建てていた」という、当時の人々の土地利用方法について新たな知見を得ることができました。

先にも述べましたとおり、近年甲斐市では頻繁に開発が行われるようになり、埋蔵文化財の保護が急務となってきております。今後は調査で得られました成果を後世に伝えていくとともに、学校教育や歴史研究、生涯学習の資として多くの方々に幅広く活用していただければ幸いです。

最後に、工事主体者である山梨県中北建設事務所の文化財保護に対する深いご理解のもと、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に感謝申し上げ序といたします。

平成30年３月

甲斐市教育委員会

教育長　**西　山　　豊**

例　　言

1．本書は、山梨県甲斐市大下条に所在する御岳田遺跡第８次発掘調査報告書である。
2．調査は、都市計画道路田富敷島線大下条第２期工区道路改良工事に伴い実施された。調査面積は道路拡幅予定地450㎡である。調査費用負担は山梨県による。
3．発掘調査及び整理分析調査期間
　試掘調査　　平成27年７月13日～同年７月14日、平成28年６月21日～同年７月６日
　発掘調査　　平成28年11月14日～平成29年２月17日
　整理分析調査　平成29年７月５日～平成30年２月28日
4．調査組織は次のとおりである。
　調査主体者　　甲斐市教育委員会
　調査担当者　　長谷川 哲也（甲斐市教育委員会）
　調査事務局　　甲斐市教育委員会 教育部 生涯学習文化課 文化財係
　発掘・整理分析調査協力員（敬称略・五十音順）
　　青柳 正史　秋山 髙之助　伊井　実　飯沼 源治　小林　求　斉藤 功記　佐藤 真紀　菅沼 芳治
　　醍醐 三郎　髙添 美智子　瀧口 晴彦　立花 重光　田中 ひとみ　堤　吉彦　手塚 松雄　新津 多恵
　　羽中田 勲　日向 充雄　深澤 友子　古屋 秀雄　望月 厚子　望月 典子　森沢 篤美　横内　博
5．本書は長谷川が執筆した。
6．報告書作成にあたり、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略）
　坂本 美夫　新津　健　中込 司郎　鈴木 麻里子　畑　大介（以上、甲斐市文化財保護審議委員）
　室伏　徹（山梨県考古学協会）望月 秀和（山梨文化財研究所）
7．本書の編集及び遺構、遺物の写真撮影は長谷川が行った。
8．遺構測量と平面図作成、出土遺物の出土位置記録は疾測量株式会社（甲斐市篠原1346－１）に委託した。
9．御岳田遺跡第８次発掘調査において得られたすべての資料は一括して甲斐市教育委員会に保管してある。

凡　　例

1．座標は世界測地系に準拠した。また、標高は東京湾平均海水面水準である。
2．遺構堆積土及び土器の色調は、農林水産省農林技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』に準拠している。
3．本書の遺物実測図に用いたスクリーントーンは、次のとおりである。
　須恵器断面　　灰釉陶器断面　　緑釉陶器断面
　内面黒色加工　　青磁断面　　擦り面
4．各挿図の縮尺は、遺構１/40、土器１/３、石器・石製品１/２を原則とし、それぞれにスケールを付した。
5．出土遺物の時期検討は『山梨県史　資料編２原始・古代２』をもとにした。
6．出土遺物観察表の計測値欄中、（　）内数値は推定を表し、残部の計測は数字の頭に「残」記した。
7．遺構平面図中の数字と黒点は、遺物挿図番号と出土位置を表す。
8．遺物番号は本文、挿図、観察表で統一し、１～76の通し番号を付してある。
9．本書で使用した地図は、甲斐市都市計画地図である。

本　文　目　次

序文／例言／凡例／本文目次
第１章　調査の概要……1
第２章　遺跡の立地と環境
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……3
第３章 遺構と遺物
　第１節　基本層序……10
　第２節　遺構と遺物……11
第４章　まとめ……18

挿　図　目　次

第１図　甲斐市の位置……３
第２図　周辺地形図……６
第３図　御岳田遺跡と周辺の遺跡……７
第４図　調査区位置図……８
第５図　調査区全体図……９
第６図　基本土層図・土層説明……10
第７図　１区　遺構と遺物……20
第８図　２区Ｂ　遺構と遺物……21
第９図　２区Ｃ　遺構と遺物①……22
第10図　２区Ｃ　遺構と遺物②……23
第11図　２区Ｃ　遺構と遺物③……24
第12図　２区Ｃ　遺構と遺物④……25
第13図　２区Ｃ　出土遺物……26
第14図　３区Ａ北　遺構と遺物①……28
第15図　３区Ａ北　遺構と遺物②……29
第16図　３区Ａ北　遺構と遺物③……30
第17図　３区Ａ南　遺構と遺物……31
第18図　３区Ｂ北　遺構と遺物①……32
第19図　３区Ｂ北　遺構と遺物②……33
第20図　３区Ｂ北・３区Ｃ　出土遺物……34

表　目　次

第１表　１区出土遺物観察表……20
第２表　２区Ｂ出土遺物観察表……21
第３表　２区Ｃ出土遺物観察表……27
第４表　３区Ａ北出土遺物観察表……30
第５表　３区Ａ南出土遺物観察表……31
第６表　３区Ｂ北出土遺物観察表……34
第７表　３区Ｃ出土遺物観察……34

写真図版目次

図版１　１区
　１区　完掘（南から）
　１区　調査前風景（南から）
　１区　３号竪穴状遺構　完掘（南から）
　１区　調査風景
　１区東壁　土層堆積状況

図版２　２区Ａ
　２区Ａ　完掘（南から）
　２区　調査前風景（南から）
　２区Ａ　調査風景
　２区Ａ南壁　土層堆積状況
　２区Ａ北壁　土層堆積状況

図版３　２区Ｂ
　２区Ｂ　完掘（北から）
　２区Ｂ　遺構検出状況（北から）
　２区Ｂ　１号溝　完掘（北から）
　２区Ｂ東壁　土層堆積状況
　２区Ｂ　調査風景

図版４　２区Ｃ①
　２区Ｃ　完掘（南から）
　２区Ｃ　調査区周辺の様子（北から）

図版５　２区Ｃ②
　２区Ｃ　２号竪穴状遺構　完掘（西から）
　２区Ｃ　１号溝状遺構　完掘（西から）
　２区Ｃ　１号集石　検出（南西から）
　２区Ｃ　２号集石　検出（南西から）
　２区Ｃ　３号集石　検出（南西から）
　２区Ｃ　１号土器集中　出土状況
　２区Ｃ　土器（42･31）出土状況（北から）
　２区Ｃ　調査風景

図版６　３区Ａ北①
　３区Ａ北　完掘（西から）
　３区Ａ北　完掘(南から)

図版７　３区Ａ北②
　３区Ａ　調査前風景
　３区Ａ北　１号住居跡　完掘（西から）
　３区Ａ北　１号住居跡　完掘（北から）
　３区Ａ北　２号住居跡　完掘（南西から）
　３区Ａ北　３号住居跡　完掘（北から）
　３区Ａ北　４号竪穴状遺構　完掘①（南から）
　３区Ａ北　４号竪穴状遺構　完掘②（南から）
　３区Ａ北　１号土坑　完掘（東から）

図版８　３区Ａ南
　３区Ａ南　完掘（西から）
　３区Ａ南　２号土器集中　出土状況（西から）
　３区Ａ南　２号土器集中　完掘（北東から）
　３区Ａ南　調査風景
　３区Ａ南 南壁　土層堆積状況

図版９　３区Ｂ北
　３区Ｂ　調査前風景（南から）
　３区Ｂ北　３号土坑　完掘（西から）
　３区Ｂ北　４号住居跡　完掘（北から）
　３区Ｂ北　４号住居跡　完掘（西から）
　３区Ｂ北　完掘（北から）

図版10　３区Ｂ南・３区Ｃ
　３区Ｂ南・３区Ｃ　調査前風景（北から）
　３区Ｂ南　調査風景
　３区Ｂ南　完掘（北から）
　３区Ｃ　調査風景
　３区Ｃ　完掘（北から）

図版11　出土遺物

図版12　出土遺物

第１章　調査の概要

１．調査に至る経緯

山梨県道25号は、甲斐市中下条から中央市布施を結ぶ県道である。市町村合併によって敷島町が甲斐市、田富町が中央市となったことで、現在の路線名は「甲斐中央線」と呼ばれている。県道25号（以下、本路線）は、甲斐市内では竜王駅北側の島上条・中下条・大下条の各地区と、竜王駅南側の篠原や西八幡などの各地区を結び、多くの市民・県民の生活に必要不可欠な路線である。本路線はいくつかの主要幹線道路と交わっており、竜王駅以北では甲府市道愛宕町下条線および甲府韮崎線（県道６号、通称：山の手通り、穂坂路）と交差し、甲府市や韮崎市方面とつながる。また、竜王駅以南では国道52号（美術館通り）や国道20号（甲州街道）をはじめ、県道５号（甲府南アルプス線）、県道３号（甲府市川三郷線）とも交差し、甲府市や南アルプス市など各地へつながる。以上のことから判るとおり、本路線は甲府盆地の南部と北部を結び、かつその他の幹線道路と多く交わることから、市民・県民にとって利用頻度の多い重要な路線である。利用頻度の多い路線は必然的に交通量も増加し、交通渋滞が発生することが多い。甲斐市内の本路線においても、竜王駅北側と南側では、朝夕の通勤通学時間帯を中心に交通渋滞が恒常的に発生している。このことから、竜王駅周辺では本路線の拡幅工事が数年来行われており、本報告も路線拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査の報告である。

本路線は周知の埋蔵文化財包蔵地「御岳田遺跡」に含まれている。また、恒久的建造物（道路）を建設するため、拡幅工事に先立って遺跡の試掘・確認調査の必要があった。調査の結果、遺構・遺物を確認したため、申請者である山梨県中北建設事務所長に対して本調査が必要であることを回答した。

写真１　県道東側　試掘状況

写真２　県道西側　試掘状況

２．調査の方法と経過

本調査は平成28年11月14日から始まった。調査対象が県道の両側にあり、一度に調査をすることは安全管理上好ましくないうえ困難を極めることから、調査区を分割して調査をすることとした。県道東側で最も南側に位置するのが１区、その北側が２区、県道西側を３区として設定し、掘削・埋戻しを繰り返しながら調査を行った。各調査区とも表土剥ぎは重機を用いたが、包含層からは手作業での掘削を行った。遺構のセクション図・エレベーション図・出土遺物の平面図は手実測および写真実測で行い、縮尺は１/20を基本とした。遺構測量と遺物の取り上げは疾測量株式会社に委託した。雨天による調査中止等もあったが、発掘調査は平成29年２月17日まで行った。

写真３　測量委託　実施状況（県道東側）

写真４　測量委託　実施状況（県道西側）

３．整理・分析作業の経過

平成29年７月５日から報告書刊行に向けて整理・分析作業を開始し、これらの作業は主に文化財整理室で行った。実測図のトレースは『Adobe Photoshop CC』、『Adobe Illustrator CC』にてデジタルトレースし、拓本の挿図編集・版組も同ソフトを用いて行った。それと並行し、発掘調査現場での情報をもとに遺構の図面や出土遺物の検討を行い、齟齬がないよう留意し本報告を記述した。これら一連の作業を終え、平成30年３月16日に報告書の刊行となった。

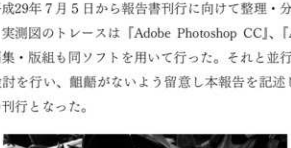


写真５　遺物実測作業

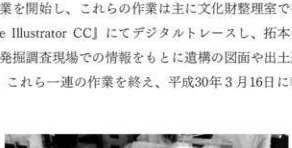


写真６　挿図編集作業

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

１．甲斐市の地理

本市は甲府盆地の北西側に位置し、東側は甲府市と昭和町、西側は韮崎市と南アルプス市に接している。平成16年９月１日に双葉町・敷島町・竜王町の３町が合併して甲斐市となり、現在の市域を構築している。面積は71.94㎢、人口は平成29年12月末現在およそ７万５千人である。

市域は標高千数百ｍの山岳地から、丘陵、扇状地などバラエティに富んだ地形である。市域はおおよそ４つのエリアに分類することができる。市の北部は茅ヶ岳(1704m)や曲岳(1642m)、太刀岡山(1259m)、黒富士(1633m)など、標高千数百ｍを超える山々が点在する「山岳エリア」。地質は主に凝灰岩や凝灰角礫岩で構成されており、南流する亀沢川によって急峻な段丘崖を構築している。また、荒川の上流である国特別名勝御岳昇仙峡付近は花崗岩で構成されている。市の中央部分は茅ヶ岳の火山活動によって形成された台地が広がる茅ヶ岳南麓の「丘陵

エリア」で、赤坂の地名にもみられるとおり、褐色で粘性が非常に強い火山灰層が広がる。市の南部は南アルプス鋸岳を源流とする釜無川（富士川）によって形成された「扇状地エリア」で、北西から南東にかけてゆるやかに傾斜する扇状地である。市の東部は、甲府市との境を流れる奥秩父山系の金峰山を源とする荒川によって形成された「荒川扇状地エリア」で、かつて大部分は水田として利用されていた。扇状地の西縁は荒川と貢川によって形成された段丘崖で、この段丘上に天狗沢瓦窯跡（山梨県指定史跡）が立地している。

第１図　甲斐市の位置

２．遺跡の立地

御岳田遺跡は市域の東部に立地し、甲府市との境界を流れる荒川と、茅ヶ岳火山によって形成された通称「赤坂（登美）台地」との間に位置し、標高は約288ｍを測る。この台地と荒川の間には、南北に延びる２本の微高地があり、本遺跡は西側の微高地上に営まれていた集落遺跡であることが、これまでの調査で明らかになっている。また、御岳田遺跡の南には、山梨県下でも著名な縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である金の尾遺跡が隣接しており、字で遺跡を分けてはいるが、互いに関連しあう遺跡であると思われる。

さて、「御岳田」の名は慶長６年（1601）の検地帳に記載されている「村西」「なかさと西」を併せた地名で、御岳塚という小さな塚が田圃の中にあったことに由来するとされる（『中巨摩郡地名誌』）。平成５年（1993）に行われた第１次調査では、花崗岩質の礫を約70㎝の高さまで墳丘状に積み上げた塚を確認しており、前述の御岳塚との関連も考えられる。また、「御岳」とは金峰山金櫻神社（甲府市御岳町）のことをさし、本遺跡の東側にある大下条集落の東縁辺を、南北に御嶽道（みたけみち）が走っていることも「御岳田」の由来になっているのであろう。

その名が示すとおり、本遺跡周辺はかつて田圃して土地利用されており、田圃や水にかかわる小字がいくつかある。「餅田」「柳田」「中更（なかさら）（フケが転訛したものか）」「深田」「泉尻」などがそれに該当する。戦後にアメリカ軍が撮影した空中写真で本遺跡周辺を確認すると、大下条の集落以外は田圃として土地利用されていることが一目瞭然であり、田圃や水に関する小字名がつけられていた理由がよくわかる。また、先の空中写真からは、今次調査区が小河川に挟まれている場所であることが看取できる。調査区の西には、「どんどん川（どんど川）」と地元で呼称されている小河川が、その東には御嶽道に沿って上条堰（一ノ堰）がそれぞれ南流しており、水と関わりが深い地名が点在することもうなずける。また、このどんどん川は『甲斐国志』にも、「（大下条）村西に百々河（どどがわ）という砂石の荒地あり、即ち荒河の古道、もとの郡界なり」と記述がある。「砂石の荒地」「（荒）河の古道」という語は今次調査によくあてはまる語句であり、全ての調査区で河川の旧河道と思われる砂礫層を確認した。

以上のことから、今次調査区は荒川扇状地が作り出した西側微高地上に立地するものの、かつては河川の流路であった場所に営まれた遺跡である。

第２節　歴史的環境

１．御岳田遺跡と周辺の遺跡

以下に主な遺跡を挙げながら、周辺の遺跡を概観することとする。荒川扇状地の西側微高地上に立地する**御岳田遺跡**の南には、県下でも著名な弥生時代後期の集落遺跡である**金の尾遺跡**がひろがる。先にも述べたが、金の尾遺跡も西側微高地に立地し、道路を挟んで本遺跡と隣接しているだけに、互いに関連しあう遺跡と思われる。この西側微高地は、金の尾遺跡で縄文時代中期の住居跡が確認されていることからもわかるとおり、縄文時代か

ら人々が生活していたことが明らかになっている。この尾根を北に進むと、平成26年度の第１次調査で、平安時代の住居跡が確認された**金ノ宮遺跡**がある。この遺跡の東西にも小河川が南流しており、やはり微高地上に立地している。縄文土器片や黒曜石の剥片・チップが多量に出土したことから、付近には縄文時代の集落も存在していたと思われるが、後世の土地利用によって削平されており、その実態は不明である。金ノ宮遺跡から北上すると、山梨県最古のミニチュア土器が出土した**石原田遺跡**となり、西側微高地上の遺跡はここで途切れることとなる。

続いて、主要地方道甲斐中央線（県道25号）のやや東側、埋没谷をはさんだ東側微高地は、西側微高地よりも濃密に遺跡が分布する。また、東側微高地上には、金峰山金桜神社（甲府市御岳町）への登拝路である「御嶽道」が南北に貫入にしており、道沿いには石造物が多いことも特徴の一つである。扇頂付近の東側微高地には、甲府盆地周辺部の古墳では北限に位置する**大塚古墳（大塚遺跡）**が位置し、そこから南へ下ると、平成27年度の本調査で石室の基底部が発見された**大庭遺跡（大庭古墳）**が位置する。石室内からは、計23個の水晶製切子玉等、古墳時代後期の良好な資料が得られ、甲府盆地北西部の当該期を研究する上で重要な調査となった。さらに南下をすると、甲斐市立敷島中学校周辺に行き当たる。**山宮地遺跡**は中世の土壙墓が多数検出され、仏具を含む銅製品類17点が一か所からまとまって出土している。隣接する**村続遺跡**では、８世紀後半から12世紀代にかけての住居跡が37軒検出された。遺物は瓦や緑釉陶器、貿易陶磁器、銅製小仏像の台座が出土しており、周辺の同時代の集落遺跡とは出土遺物の様相が異なる特徴的な遺跡である。

主要地方道甲府韮崎線をこえた先にある**不動ノ木遺跡**では、試掘調査での確認にとどまるが、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての焼失住居跡や、平安時代後期の土師器片などが出土している。不動ノ木遺跡をこえると**松ノ尾遺跡**に行き当たる。この遺跡は西側微高地の南部のほとんどを占める遺跡で、住居跡から出土した銅造仏形坐像（県指定有形文化財）がつとに著名である。また、平成27年度の調査では、周溝墓の溝から残存高84.3㎝の大型赤彩壺が出土した。また、東西の微高地上以外には、７世紀後半の登窯跡が３基発見された**天狗沢瓦窯跡**が段丘上に立地する。瓦の供給先は発見されていないものの、付近に古代寺院や役所の遺構が存在する可能性が高いと推測されている。

写真７　調査区周辺の様子
（国土地理院　地図・空中写真閲覧サービスから「甲府」（1948）を一部抜粋・加筆）

以上をまとめると、市域を見渡しても荒川扇状地エリアには遺跡が集中しており、加えて調査件数も多いことから、資料も豊富である。また、荒川扇状地エリアは、市域の歴史解明だけにとどまらず、甲斐国の歴史を研究する上でも注目すべき地域といえる。

2．御岳田遺跡の概要

次に御岳田遺跡の概要について述べる。本遺跡は前節で記したとおり荒川扇状地の西側微高地に立地しており、現況の土地利用のほとんどは宅地として利用されている。遺跡の発見は平成に入ってからで、平成４年（1992）の大型店舗建設に伴う試掘調査によって遺跡の存在が明らかとなり、これまでに今次調査を含め８度にわたる本調査が実施されている。ここでは、これまでの調査で得られた資料をもとに、時代ごとに概観する。

縄文時代

これまでの調査において、当該期の遺構は検出しておらず、遺構外遺物として縄文土器片がわずかに出土している程度である。

弥生時代

第７次調査において、初めて当該期の遺構と遺物を確認した。弥生時代後期の住居跡を２軒確認した。

古墳時代

調査によって得られた資料が豊富な時代で、４世紀中頃～５世紀初頭の住居跡８軒、５世紀中頃の住居跡１軒を確認している。特徴的な遺物として、第１次調査において遺構外から水晶の原石６点と共に丸玉未製品１点が出土し、第６次調査では１号溝跡から緑色凝灰岩製の管玉未製品が出土している。また、御岳田遺跡から南東に約500m、東側の微高地に立地する末法遺跡では２点、上下から孔が穿たれているもののずれて貫通していない管玉と珪化凝灰岩のチップがまとまって出土している。

これらの遺物が荒川右岸の微高地上の遺跡から出土したことによって、玉造り工房跡が荒川右岸の微高地を拠点として存在した可能性が現実味を帯びる結果となり、古墳時代前期の玉造りの実態を解明する上で重要な成果が得られたといえよう。ほかに、第６次調査では本遺跡で初めて周溝墓を確認しており、細長く狭い調査区ではあったが、様々な新発見があった調査であった。

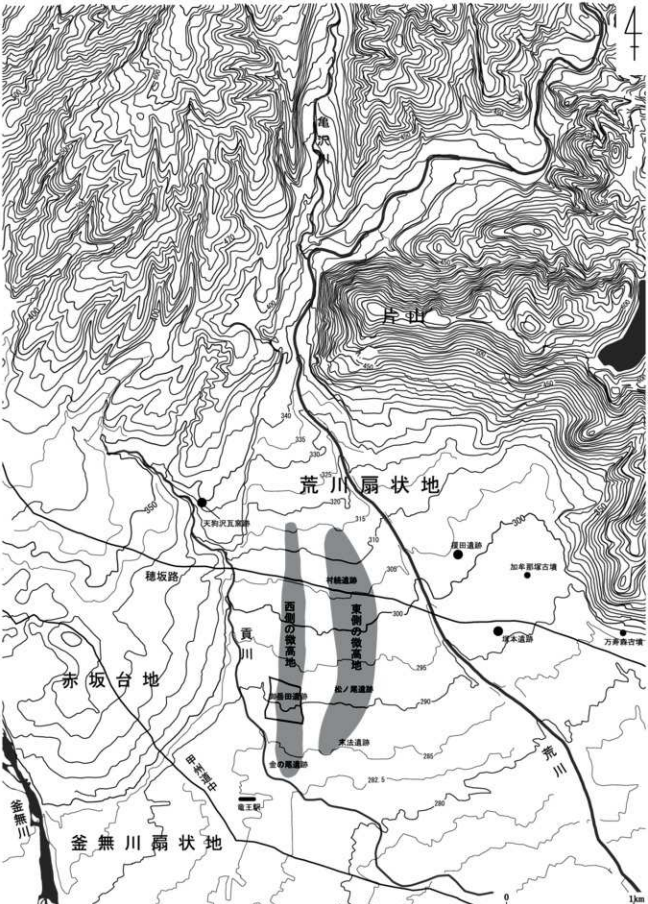
平安時代

古墳時代と共に資料が豊富な時代である。これまでの調査で住居跡の検出数は25軒である。中でも９世紀後半から10世紀前半にかけての住居跡が14軒と約半数を占める。第５次調査では、９世紀後半に位置付けられる３号住居跡から「伴」の墨書がある坏や、「有」の墨書がある皿などが出土し、調査区全体では墨書土器が合わせて17点出土している。

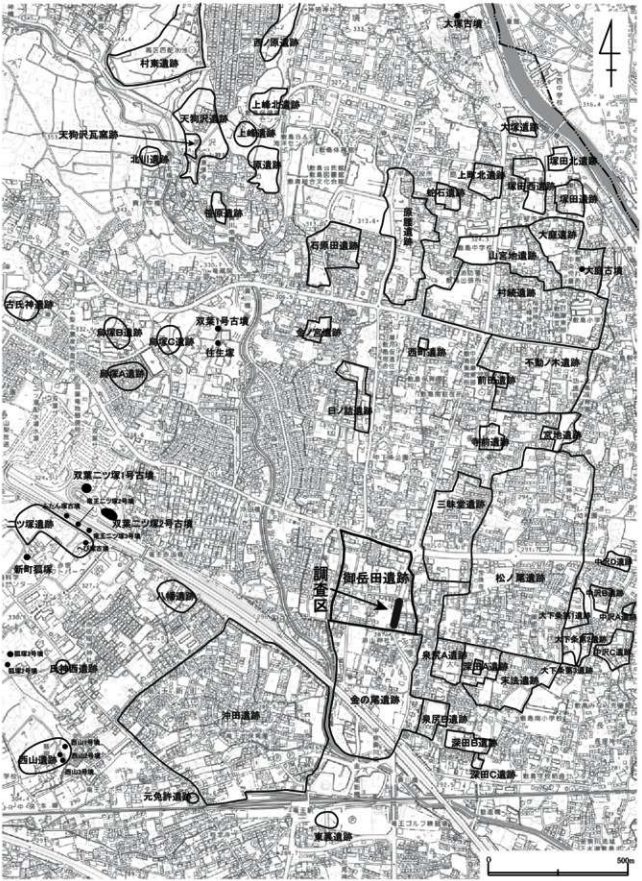
平安時代以降

第６次調査で、六文銭を伴う15世紀後半の土壙墓を確認した。

以上述べたとおり、御岳田遺跡は古墳時代と平安時代に関する調査成果が充実している遺跡である。


荒川扇状地
赤坂台地
釜無川扇状地
荒川
釜無川
貢川
種坂路
中央高速道路
竜王駅
西側の微高地
東側の微高地
村絵遺跡
松ノ尾遺跡
加番田遺跡
宋法遺跡
金の尾遺跡
塚本遺跡
万寿春古墳
加牟那塚古墳
屋田遺跡
大鹿沢瓦窯跡
0
1km

第２図　周辺地形図



第３図　御岳田遺跡と周辺の遺跡

第４図　調査区位置図

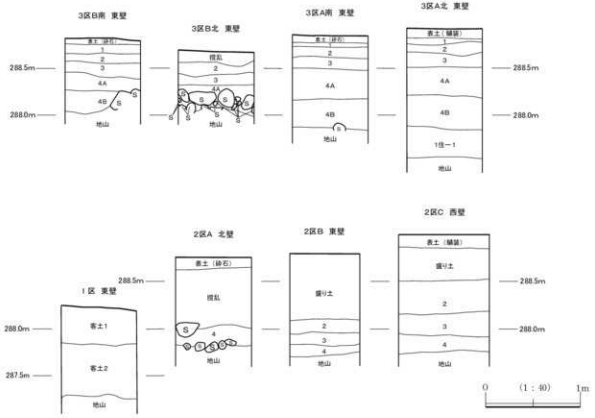
1号溝状遺構
3号集石
2号集石
1号集石
2号竪穴状遺構
1号土器集中
2号住居跡
3区A北
1号土坑
2号土坑
3号住居跡
1号住居跡
4号竪穴状遺構
2区C
3区A南
2号土器集中
1号竪穴状遺構
2区B
1号溝
撹乱
5号土坑
2号溝状遺構
5号竪穴状遺構
撹乱
3号土坑
3区B北
硬化面
4号住居跡
2区A
撹乱
3区B南
3区C
3号竪穴状遺構
1区
0
10m

第５図　調査区全体図

第３章　遺構と遺物

調査対象区域は一度に発掘調査をすることが困難であったため、１区・２区（県道東側）、３区（県道西側）と区分けして調査を行った。２区と３区は調査区内で対象範囲が飛び飛びになるため、便宜上の調査区名をつけた。そのため、調査区は１区、２区Ａ、２区Ｂ、２区Ｃ、３区Ａ北、３区Ａ南、３区Ｂ北、３区Ｂ南、３区Ｃと９カ所に及ぶ。それに伴い、本章では調査区ごとに遺構と遺物の記述を行う。

第１節　基本層序



基本層序	土層名	色番号	説　明
１層	灰色土	５Y4/1	粘性強い　しまり非常に強い
２層	暗灰黄色土	2.5Y4/2	旧水田耕作土　粘性あり　しまり非常に強い　５㎜大の小礫を含む
３層	褐色土	7.5YR4/4	旧床土　粘性あり　しまり非常に強い　１㎝大の小礫を含む
４層	暗褐色土	10YR4/3	遺物包含層　粘性あり　しまりあり　５～30㎝大の礫を少量含む
４Ａ層	黒褐色土	10YR2/3	遺物包含層　粘性あり　しまり強い　１～２㎝大の礫を少量含む
４Ｂ層	黒褐色土	10YR2/2	遺物包含層　粘性あり　しまりあり　５㎝大の礫を少量含む
客土１	褐色土	10YR4/6	耕作土　粘性あり　しまり非常に強い　石灰が混じる
客土２	黒褐色土	10YR3/2	粘性あり　しまり非常に強い　１～２㎝大の小礫を含む　アルミホイル・ビニールなどのゴミを少量含む
１区地山	オリーブ褐色土	2.5Y4/4	砂礫層　粘性弱い　しまり弱い　砂粒は粗粒砂・中粒砂　３㎜大の小礫を多量に含み、１㎝大の小礫を含む
２区地山	オリーブ褐色土	2.5Y4/4	砂礫層　粘性弱い　しまり弱い　砂粒は中粒砂　大小の円礫を多量に含む
２区Ｂ地山	にぶい黄褐色土	10YR4/3	砂礫層　粘性弱い　しまり強い　砂粒は粗粒砂・中粒砂　３㎜大の小礫を多量に含み、１㎝大の小礫を含む
３区地山	円礫層		礫と礫の間隙に暗褐色土（10YR3/4・細粒砂　粘性ほとんどなし、しまり強い）が入る

※　粗粒砂　φ１～1/2㎜の砂　　中粒砂…φ1/2～1/4㎜の砂
古環境研究所（現一般社団法人 文化財科学研究センター）「手作り粒度スケール」を基準とした。

第６図　基本土層図・土層説明

１区は２区や３区で見られる水田耕作に関する２層・３層や包含層（４層）が見られない。試掘調査の際も、耕作土を除去するとすぐに地山（砂礫層）を確認している。発掘調査終了後の工事において、重機で地表から３m以上掘削している様子を確認したが、発掘調査で検出した砂礫層が続いていた。

２区は旧水田面（２層）と旧床土（３層）の直下に包含層が堆積し、遺構は砂礫層の地山を掘り込んで作られていた。２区Ｂのみ、地山の質が異なり礫を含まない。

３区も２区と同様の堆積状況だが、地山は２区に比べて円礫が非常に多い層である。遺構は砂礫層を掘り込んで作られていたが、遺構の立ち上がりは土というより礫であった。

１区～３区の地山で検出した礫はすべて円礫で、かつ粗粒砂・中粒砂で構成されていることから、調査区は旧河道であったと考えられる。

第２節　遺構と遺物

今次調査で確認された遺構は、住居（竪穴建物）跡４軒、竪穴状遺構５基、溝１条、溝状遺構２条、集石３基、土坑４基、土器集中２ヵ所である。遺物はほとんどの調査区において出土量が少なく、調査区全体で収納箱３箱分であった。以下、それぞれの遺構・遺物について調査区ごとに述べる。

【１区】

３号竪穴状遺構（遺構・遺物：第７図）

形状・規模　検出した長軸（南北）は4.1m、短軸（東西）は2.25m。遺構の東半分は調査区外。遺構の深さは20㎝～30㎝。

遺　　物　３点を図化したが、その他は甲斐型坏を含む土師器小破片が多数出土。１は甲斐型坏で、10世紀前半ないし10世紀後半に位置付けられる。２は甕（壺）の底部、３は碁石状の土製品。

遺構時期　平安時代中期か

調査所見　１区周辺は、道路の高さに合わせるための客土直下に地山である砂礫層となる。試掘調査時に、１区と設定した調査区以外から遺物の出土はなかったものの、遺構の覆土である１層・２層からは遺物が出土した。わずかに残る掘り込みと、セクション図から遺構のラインを推定した。本遺構は地山の砂礫層を20㎝～30㎝ほど掘り込んで作られていた。砂地のため、壁の立ち上がりはやや不鮮明であった。

【２区Ａ】

地表下約70㎝までカクラン、わずかに包含層（４層）が残り、以下は地山（砂礫層）である。包含層から摩耗した土器小片が数点、カクラン内からも土器片が出土した。包含層は他の調査区と比べると、礫が多く含まれており、３区Ｂ南の４Ａ層と似る。地山は大小の円礫がほとんどを占めており、遺構は確認していない。

【２区Ｂ】

１号竪穴状遺構（遺構・遺物：第８図）

形状・規模　検出した長軸は2.7m、短軸は7.5m。遺構の深さは20㎝～30㎝程度。１号溝に切られている。１号溝に切られているが、遺構の深さはほぼ同じである。

遺　　物　図化遺物は３点。それ以外は摩耗した土器が数点出土したのみ。４は櫛描波状文が施された甕の口縁部。５は坏（皿）の口縁部、焼成がやや甘く触れるとザラザラとしている。６は小型の甕で、古墳時代後期（７世紀後半）に属すると思われる。

遺構時期　時期不明

調査所見　本遺構は全ての調査区の中で検出状況が明瞭で、地山と遺構の区別が容易であった。２区Ｂの地山は円礫を含まない砂質の地山で、荒川扇状地上の遺跡で通常確認できる地山と同じ土質であった。遺構の時期は、出土遺物が少なく小破片がほとんどであるため、時期の特定が困難である。

１号溝（遺構・遺物：第８図）

形状・規模　検出した長さは2.6m、幅は40㎝～ 60㎝、深さは約40㎝である。溝底は全体が平坦である。１号竪穴状遺構を切る。

遺　　物　２点を図化したほかは、摩耗した土師器小片が数点出土したのみ。７は坏の口縁部で、古墳時代後期に属するか。８は甲斐型坏だが摩耗が著しい。

遺構時期　時期不明

遺構外出土遺物（遺物：第８図）

包含層である４層から、灰釉陶器製の長頸壺の破片が出土した。その他、摩耗した土師器小片が数点出土。包含層の出土遺物は隣接する２区Ｃの包含層から出土した遺物と比較すると、出土量が極端に少ない。

【２区Ｃ】

２号竪穴状遺構（遺構第９図）

形状・規模　検出部分の長さ南北2.1m、東西1.2m、深さは60㎝。遺構外へと伸長するため、全体の規模は不明である。１号集石、２号集石に切られている。

遺　　物　図化遺物なし。摩耗した土師器破片が数点出土。

遺構時期　２号集石に切られていることから平安時代中期以前と推定

調査所見　砂礫層の地山を掘り込んで作られている。覆土にも礫が含まれていたが、地山に含まれる礫の量とは異なり少ない。遺構の底や立ち上がりは地山に含まれる多量の円礫によって移植ゴテで掘削できなくなった。遺構の正確な時期は不明である。

１号溝状遺構（遺構：第９図、遺物：第10図）

形状・規模　２区Ｃの北端に位置する。検出部分の長さは東西2.25m、検出部分の幅は南北80㎝～１m。遺構の深さは60㎝。北側の立ち上がりは調査区外となるため不明である

遺　　物　時期が特定できそうな10点を図化したが、いずれも小破片が多い。10は坏で、玉縁口縁を持つ。胎土は緻密だが、焼成はやや粗雑。11は坏の口縁部。10よりも器壁が薄く、口縁も玉縁化が顕著である。12は皿の底部で、底部には手持ちヘラ削りが施されている。13、14も坏だが、14は器壁が肉厚でロクロナデが内外面に施されており、かつ胎土も甲斐型土器とは異なるため、いわゆる北巨摩型の坏と思われる。15は高台付坏で、内面が内黒加工されている。17は緑釉陶器破片。18は内面に釉薬が塗布された灰釉陶器口縁部。19は厚口口縁の甕である。図化できなかった遺物も含め、本遺構の出土遺物を概観すると、10世紀前半から10世紀後半にかけての遺物が主を占める。

遺構時期　平安時代中期

調査所見　砂礫層の地山を掘削して作られているため、遺構の立ち上がりは拳大の円礫がほとんどである。溝底は水流の影響か、やや赤茶けた色をした極粗粒砂と団子程度の大きさの礫で構成されている。覆土は水分を多く含み粘性は非常に強い。移植ゴテなどの掘削道具に粘着質にへばりつき、なかな

か除去できないほどであった。

1号集石（遺構：第10図）

形状・規模　検出部分の長軸は0.75m、短軸は0.65mで、検出時の形状は方形に近い形であった。また、遺構の掘り込みは見られなかった。

遺　　物　図化遺物なし。土師器極小片が3点出土。

遺構時期　時期不明

調査所見　地山に暗褐色土（4層）が堆積しはじめた段階で礫を配置している様子がうかがえ、暗褐色土の堆積状況に差異によって、地山上に礫を配置した部分も見られた。

2号集石（遺構・遺物：第11図）

形状・規模　検出部分の長軸は1.15m、短軸は0.6mで、検出状況は長方形に近い形状をしていた。1号集石と同様、遺構の掘り込みは確認できなかった。

遺　　物　図化遺物3点。20は台付甕の脚部破片。21は底部手持ちヘラ削りを施した甲斐型土器の皿。22も皿だが、器壁が21より薄く口唇部の玉縁化が著しい。

遺構時期　平安時代中期か

調査所見　1号集石と同様、暗褐色土（4層）が堆積し始めた段階で礫を配置している様子がうかがえる。遺物は礫の隙間から出土しているため、集石が作られたのちに土器が礫の隙間に入り込んだ可能性も考えられる。

3号集石（遺構・遺物：第11図）

形状・規模　検出部分の長軸は1.1m、短軸は0.65m。2号集石と形状、規模ともに類似する。集石では唯一、約30㎝の掘り込みを確認した。

遺　　物　2点を図化した。23は底部に回転ヘラ削りが施された坏。24の器形は鉢と思われる。その他、出土遺物は土師器小片を中心に、須恵器が数点出土した。

遺構時期　時期不明

調査所見　3号集石は1号集石・2号集石と比較しても礫の点数が多く、隙間なく配置されていた。遺物はそのわずかな隙間から出土している。また、集石の上部隙間には、わずかな焼土と赤化した礫を確認した。さらに、骨片と思われるものを1点確認した。骨片らしきものは風化が進んでおり、取り上げた段階で形を失ってしまったため詳細は不明である。

1号土器集中（遺構・遺物：第12図）

出土状況　調査区の中央付近の地山上、周辺よりも礫がやや集まる場所から出土した。出土遺物は25と26は互いの口縁を合わせたような形状で出土したほか、26を取り上げた下から27が出土している。

遺　　物　5点を図化した。25～29はいずれも土師質土器で胎土・形状ともに同種である。底部糸切り痕が明瞭に残り、また、割れ口は摩耗している。御岳田遺跡6次調査の際に、土壙墓から本遺構出土の土師質土器と胎土・形状ともに類似する土器（『御岳田遺跡6』第13図－1）が出土している。

遺構時期　15世紀後半

調査所見　礫は人為的に集められたようにも見えるが、前述の集石のように礫が積まれている状況は確認できなかった。加えて、礫を除去しても掘り込んだ形跡が認められず、地山との区別がつかなかった

ことから土器集中遺構とした。

遺構外出土遺物（遺物：第12図、第13図）

30は包含層（４層）から出土した完形の土師質土器皿である。出土位置は１号溝状遺構付近である。１号土器集中から出土した土師質土器と形状は似るが、胎土は大きく異なり、白色粒子を多量に含んでいる。31は完形の甲斐型土器の坏で、42（須恵器甕　転用硯）と近接して出土した。底部は手持ちヘラ削りが施されている。32・33は甲斐型土器の皿で、32は底部を手持ちヘラ削り、33は回転ヘラ削りを施す。32の焼成はやや甘く、器面に剥離が生じている。34～37は土師器坏口縁部。そのうち35～36は暗文が施されている。また、36は内黒土器である。38は甕の口縁部で、古墳時代後期に属すると思われる。39は灰釉陶器の高台付皿と思われる。高台底部にはわずかに釉薬が付着しており、焼成時に土器を重ねた際に付着したものであろう。40は内外面にミガキが施された坏。41は内面外面ともに摩耗が著しい複合口縁壺の口縁部。内面には横位ハケ目が施されている。42は須恵器甕の転用硯。内面にわずかに使用痕跡が認められた。43は甕の口縁部で、胎土や形状から時期は10世紀後半頃であろう。44・45は石製品。

いずれも包含層から出土しているが、37・38・41は２層および３層から出土している。

【３区Ａ北】

１号住居（竪穴建物）跡（遺構・遺物：第14図）

形状・規模　検出した長軸は南北4.2m、短軸は東西1.4m。遺構の深さは35㎝前後。遺構の大半は調査区東壁側へ伸長する。４号竪穴状遺構を切り、２号住居跡を切る。

遺　　物　２点を図化した。46は甕の口縁部。胎土から甲斐型の甕と考えられる。47は突帯付壺である。四耳壺とは断定できない。ほか、土師器破片がビニール袋にして１袋ほど出土しているが、破片がほとんどを占め、接合する個体もなかった。しかし、図化しなかった出土遺物も考慮し、本遺構は10世紀前半頃と考えた。

遺構時期　平安時代中期（10世紀前半）

調査所見　遺構検出面まで掘り下げた際、明瞭に遺構が確認できた。検出面には礫がほとんどなかったが、遺構を掘削する過程で徐々に増えていき、住居床面や壁は拳大の礫を多く含むようになる。遺構の覆土に礫があまり含まれておらず、床や壁に礫が多く含まれていたことから、地山の砂礫層を掘り込んで造られた遺構であると判断した。床は拳大の礫が現出しており、硬化面や貼床は確認していない。

２号住居（竪穴建物）跡（遺構・遺物：第15図）

形状・規模　検出した長軸は、南東から北西方向へ2.4m、短軸は南西から北西方向へ1.6m。遺構の深さは20㎝～30㎝程度。遺構の大半は調査区北壁側へ広がっていると思われる。１号住居跡に切られる。

遺　　物　図化した遺物は２点。48は甕（壺）の底部で、古墳時代中期から後期に属すると思われる。49は打製石斧。その他、土師器が数点出土した。48の遺物のみで遺構時期を特定することは困難なため、１号住居跡に切られていることから、遺構時期は下記のとおりとした。

遺構時期　平安時代中期以前

調査所見　１号住居跡と同様、検出時に明瞭に遺構が確認できた。床面や壁には礫が含まれるため、１号住居跡と同様に地山の砂礫層を掘って造られたと思われる。床面には直径40㎝程度の円礫が地山から現出している。

３号住居（竪穴建物）跡（遺構：第15図）

形状・規模　検出した長軸は南北2.9m、短軸は東西1.0m。遺構の深さは25㎝～ 30㎝程度。遺構の大半は調査区西壁側へ伸長する。４号竪穴状遺構を切り、２号土坑に切られる。

遺　　物　図化遺物なし。土師器が少量出土し、甲斐型土器と同様の胎土の土師器小片が含まれる。

遺構時期　平安時代か

調査所見　１号住居跡・２号住居跡と同様、地山を掘り込んで造られている。１～３号住居跡は、調査時に長靴で床面を歩いた時、またブルーシートで養生した床面を歩く際にも、靴底で円礫を踏むと、足の裏に円礫が当たる感覚が手に取るようにわかり、大変歩きにくかった。このような床面に直接生活していたとは考えにくいが、何かを敷いて生活していたとしても、現代人の感覚からすると「住みにくい」と感じてしまった。

１号土坑（遺構：第15図）

形状・規模　検出部分の長さは東西92㎝、南北125㎝。遺構の深さは30㎝前後。遺構は調査区西壁側に伸長する。形状は隅丸方形と思われる。

遺　　物　出土遺物なし

遺構時期　時期不明

２号土坑（遺構：第15図）

形状・規模　検出部分の長さは東西70㎝（推定）、南北90㎝。遺構の深さは20㎝前後。遺構は調査区西壁側に伸長する。土坑の南側は３号住居跡を切る。形状は楕円形と思われる。

遺　　物　出土遺物なし

遺構時期　時期不明

４号竪穴状遺構（遺構・遺物：第16図）

形状・規模　検出部分の長さ東西1.8m、南北1.3m。遺構の深さは30㎝～ 50㎝。１号住居跡・３号住居跡に切られる。調査区南壁側に遺構が伸長していると思われたが、３区Ａ南では検出されなかった。

遺　　物　図化した遺物は１点のみ。縄文土器だが、遺構に入りこんだものであろう。他、出土遺物は土師器小破片がわずかに出土。

遺構時期　時期不明（平安時代中期以前）

調査所見　検出面から礫があらわれ、遺構の覆土も大小の円礫を含み、隣接する住居跡とは覆土が大きく異なる。北方向に伸びる部分はカマドのように見えるが、カマドを構築した形跡が全く認められず、カマドと断定するには至らなかった。遺構時期は１号住居跡に切られていることから、平安時代中期以前に属すと考えられるが、時期の特定には至らなかった。

遺構外出土遺物（遺物：第15図）

50・51は緑釉陶器、52は２区Ｃ１号土器集中で出土した土師質土器と同様の皿。底部は糸切りののち、ヘラ状の工具で底部外円部を削るように調整してある。53は甲斐型土器の皿で、底部は回転ヘラ削りを施してある。54は黒曜石製石鏃。いずれも包含層の４Ａ層・４Ｂ層から出土した。

【３区Ａ南】

２号土器集中（遺構・遺物：第17図）

出土状況　３区Ａ南の中央付近に、完形の土師質土器３点がほぼ等間隔に並んで出土した。

遺　　物　図化遺物３点。56・57・58は土師質土器で、１号土器集中の土師質土器（25～29）と形状・胎土が類似し、同時期のものと考えられる。

遺構時期　15世紀後半

調査所見　調査区は包含層を除去すると地山であるが、隣接する３区Ａ北と異なり、地山の礫の大きさが30㎝以上のもの多数あった。その中で、56・57・58の土器が出土した地点は、礫に囲まれるように黒褐色土（４Ａ層）が堆積しており、人為的に礫を除去して土器を設置したように思える。セクション図で示したとおり、堆積は黒褐色土１層で、土質は包含層の４Ａ層と同様であった。このことから、礫と礫の隙間に自然堆積した黒褐色土上に、人為的に土器を設置したと推定した。

【３区Ｂ北】

４号住居（竪穴建物）跡（遺構・遺物：第18図）

形状・規模　検出した長軸は南北４ｍ、短軸は東西2.36ｍ。遺構の深さは20㎝前後。遺構は調査区南壁・東壁側へ伸長し、全体の形状は不明だが、隅丸方形ないし隅丸長方形と思われる。

遺　　物　８点を図化した。60・61・62・63・64は甲斐型土器である。いずれも底部は回転ヘラ削りを施してある。60～64の５点は９世紀後半から10世紀前半に属する。59の坏は信州系黒色土器の胎土とよく似ている。65は貼付高台付坏である。66は住居覆土の下層から出土した青磁である。

遺構時期　平安時代中期（９世紀後半～10世紀前半）

調査所見　包含層である４Ａ層・４Ｂ層を掘削後、地山の砂礫層に囲まれた中に、礫を含まない部分との大きな土師器片が出土する部分を確認した。この部分を丁寧に掘り下げていくと、第18図に示したように硬化面が確認でき、床面直上からは完形に近い甲斐型の坏等が出土した。遺構覆土の色調は遺構直上の４Ｂ層と大差はないため、当初は４Ｂ層が地山の落ち込み部分に堆積しているものと思われたが、前述のとおり硬化面や床面直上から土師器が出土したため、住居跡と判断した。本住居跡の壁は礫が壁面として使用されていると思しき部分がほとんどで、硬化面下を掘削すると地山となる。他の住居跡と同様、砂礫層の地山を掘り込んで造られている。

５号竪穴状遺構（遺構：第19図）

形状・規模　検出した長さは東西1.8ｍ、南北1.2ｍ。遺構の深さは25㎝前後。５号土坑を切り、２号溝状遺構に切られる。

遺　　物　図化遺物なし

遺構時期　時期不明

調査所見　５号土坑との新旧関係は、５号竪穴状遺構を底まで掘削したところ、半円形に５号土坑のプランが確認できたため、５号土坑を５号竪穴状遺構が切っていると判断した。また、新旧関係はセクション図でも明らかになった。

２号溝状遺構・５号土坑（遺構・遺物：第19図）

形状・規模　検出した長さは２つの遺構を合わせて東西4.1ｍ、南北の長さは２号溝状遺構1.7ｍ、５号土坑1.0ｍ。２号溝状遺構の深さは65㎝前後、５号土坑は30㎝前後。

遺　　物　２号溝状遺構から出土した土師質土器の柱状高台（67）を図化した。11世紀末～12世紀に属するものであろう。その他、出土遺物は小片が主であったが、中には１号・２号土器集中で見られた土師質土器も数点出土していることから、遺構時期は少なくとも平安時代後期から15世紀後半の間で機能していたと思われる。

遺構時期　11世紀末～15世紀後半

調査所見　５号土坑との新旧関係が不明瞭であったため、平面図で切り合いを図示していない。２号溝状遺構の覆土は水分が多く、粘性が非常に強かった。２区Ｃの１号溝状遺構の覆土と土質がよく似ている。

３号土坑（遺構：第19図）

形状・規模　検出した長軸は1.3m、短軸は1.15m。遺構の深さは40㎝前後。形状は遺構の北西部分のみ方形を呈するが、全体的に楕円形である。

遺　　物　図化遺物なし。他の出土遺物は土師器小片数点のみ。

遺構時期　時期不明

調査所見　プランは明瞭で、覆土を掘削すると底から立ち上がりまで円礫を含む地山であり、地山の砂礫層を掘削して遺構が掘られていることが確認できた。

遺構外出土遺物（遺物：第19図、第20図）

いずれも包含層から出土した遺物である。69・70は甲斐型土器の坏である。どちらも９世紀後半に属するものと思われる。71は器壁が厚く、ナデ調整が顕著であることから、第10図－14と同様、北巨摩型の土師器であろう。72も土師器坏で、内面には摩耗して消えかかった暗文がわずかに確認できる。73は内外面に釉薬のかかった灰釉陶器製長頸壺の頸部。74は器台ないし高坏の脚部である。脚部には孔が３か所確認できる。75は内面に同心円状暗文が施された土師器皿である。他にも各時代の遺物が出土しているが、おおむね平安時代中期の遺物が多い。

【３区Ｂ南】

調査区全域は、薄く堆積する遺物包含層（４Ａ層）の直下が地山の砂礫層となる。そのため、検出した遺構はない。３区Ｂは全調査区の中でも礫の割合が多く、大小様々の円礫が調査区を埋め尽くしている。他の調査区と異なり地山は礫層である。その礫の隙間に包含層の黒褐色土が入り込んでいるが、包含層を取り除いても新たな礫が顔をのぞかせるだけであった。遺物は土器小片が出土したのみで、図化した遺物はなし。

【３区Ｃ】

現状地盤から最大約100㎝まで掘削した。地表下約50㎝までは盛り土とガラス瓶や空き缶などの不燃物を伴う層であったため、他の調査区のように旧水田面は確認できなかった。地表下50㎝以降は大小の円礫を多量に含んでいる。近接する３区Ｂ南とは地山の様相が若干異なり、他の調査区と同様砂礫層が地山であった。出土遺物は砥石（第20図－76）が地山直上から出土したのみである。土層の堆積状況は、ほとんどが攪乱であったことと調査区が矮小であったことから図化していない。

第４章　まとめ

御岳田遺跡は第１章、第２章で述べたとおり、古墳時代・平安時代の調査成果が充実している遺跡である。今次調査でも、それらの時代の新たな調査成果が蓄積され、荒川扇状地上に立地する当時の集落や土地利用について、新しい知見を得ることができた。それらを以下に述べる。

地山の砂礫層について

調査区各所で地山の砂礫層を確認した。大小の円礫を含むため、遺構掘削は移植ゴテが礫にあたって掘りにくく、廃土の運搬にも苦慮した。２区Ｂ以外の調査区では、大小の円礫と粗粒砂・中粒砂を含む層が地山であり、短絡的ではあるが、旧河道であったと思われる。では、旧河道であったと考えられる理由について、もう少し掘り下げてみたい。

包含層（調査区東側の４層、調査区西側の４Ａ層・４Ｂ層）から出土した土器は、割れ口が摩耗し丸みを帯びている土器が多い。砂礫層が旧河道であれば、水流の影響によって土器が摩耗したと考えてもよかろう。また第２章の写真７も参考となる。白黒の空中写真の濃淡によって、旧河道を認識する方法もある。国土地理院のホームページには「氾濫原の中に周囲より暗い色調の帯状模様があり、その縁に沿って微少な凸地が認められることから、帯状の低い部分は旧河道、その縁の凸地は自然堤防と推定される」とある（1）。また、木下晴一氏の論考「微地形分類の視点と方法－坂出市川津町西部を例に－」において、「写真の色調に注目すると、明るい色 調に写る部分と暗く帯状に写る部分が目につく。暗い帯は、右（東）側に写る天竜川の流路と比較するまでもなく旧河道であり、明るい部分は微高地（旧中州）である。これは土地利用においても明瞭に区分できる。」とある（2）。これらを前提として改めて写真７をみると、調査区周辺は周辺よりも暗い色調となっている。また、現在の県道甲斐中央線は、南から北へ向かうと大下条集落の西側を避けるようにカーブして作られている。写真７をみると県道が通っている付近も色調が暗い。これも旧河道の傾斜に沿って造成されたため、県道もこのようなカーブを描いたのではないかと推測できる。実際にカーブを描く付近は金の尾遺跡の発掘調査において、今次調査で検出したものと同様の砂礫層が確認されており、写真色調の濃淡で旧河道を判別する手段と考古学的調査結果が合致している。荒川扇状地の微地形に関しては、もう少し細かく地形観察をする必要があるが、以上のことからも、調査区は旧河道であった可能性が高い。しかし、暗褐色土の包含層（４層・４Ａ層・４Ｂ層）出土の土器片の多くは摩耗しているが、包含層が直接河川の氾濫によって堆積した形跡は確認できなかった。

註

(1)　国土地理院ホームページ「地形判読のためのページ」旧河道・自然堤防（http://www1.gsi.go.jp/geowww/Photo_reading/kyusikadou.html）

(2)　木下晴一「微地形分類の視点と方法－坂出市川津町西部を例に－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅷ』2012

遺構の立地について

すでに第３章でも述べたとおり、遺構は地山の砂礫層を掘削して作られていた。まず、住居（竪穴建物）跡の立地について考察する。住居跡は全部で４軒確認し、いずれも住居床面や壁の立ち上がりにも大小の円礫が見られる。今次調査区の北側に位置する４次調査区、西側に位置する６次調査区の地山も、円礫を含む地山である。ただし、今次調査区のように地山全面が砂礫層というわけではなく、ところどころで見られる程度である。前述したとおり、調査区周辺は旧河道でであったと考えられることから、周辺の調査区でも礫の多寡はあれ、旧河道や水辺に近い場所であった。この「水辺に近い」ということが、住居を作る上でどのような影響があったのか。現代を生きる人間の感覚では、「家の床が礫では住みにくいのではないか」と考えてしまい、かつ中世社会における無縁的・境界的な領域である河原に集住した「河原者」というワードが頭をよぎる。しかし、今次調査で確認した遺構時期が明確な１号住居跡（10世紀前半）・４号住居跡（９世紀後半から10世紀前半）と同時期の住居

跡は、４次調査区・６次調査区でも６軒確認されている。このことから調査区周辺では地質を意識することなく、普遍的に人々が生活していたと思われる。

次に集石遺構について述べる。集石の形態は、甲府市高畑の秋山氏館跡の集石墓が参考となった。今次調査で確認した集石遺構は３基であるが、集石の下層に掘り込みを持つものは３号集石１基のみで、１号集石・２号集石ともにほとんど掘り込みはない。秋山氏館跡で検出された集石墓の遺構時期は15世紀から16世紀であるが、今次調査で検出した集石は時期が不明であり、ただちに集石を集石墓と認識することは難しい。しかし、その形状が類似していることや、３号集石からわずかな焼土と細かな骨片が出土したことを好意的に解釈すれば、本遺跡の集石も「集石墓」と考えて良いだろう。そうなると、墓を水辺に近い（もしくは水辺であった）場所に設けたことは、前述の中世社会における河原を無縁・境界として考えていた当時の人々の意識を探る上で、重要な資料となる。

おわりに

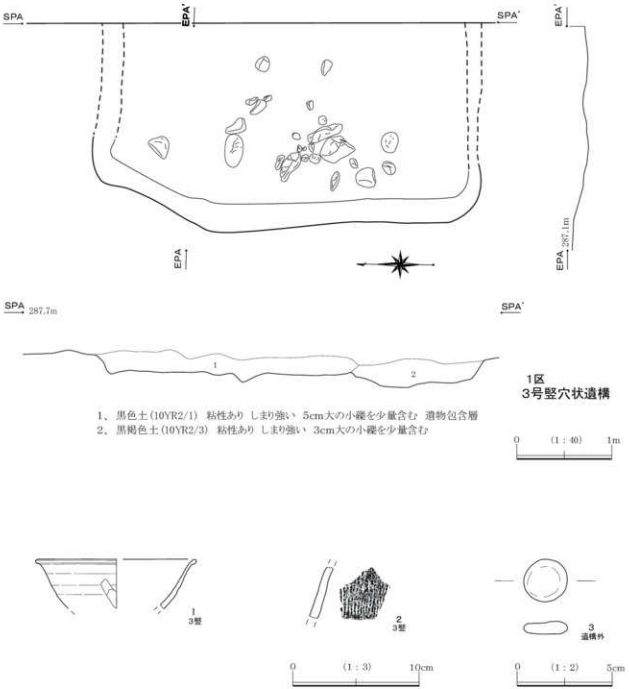
以上みてきたように、今次調査では旧河道であった場所にも人々が住んでいたあとが確認され、周辺の調査区と同様、地山の土質を意識することなく集落が立地していたことがわかった。しかし、調査区全体でみると遺構の確認数、遺物の出土量は少ない。このことから、御岳田遺跡の本体は１次調査区や４次調査区にあると思われ、今次調査区よりも北側や西側が主な集落域であったと考えられる。県道西側の調査区から住居跡が検出されていることからも、それは何い知ることができる。今後も調査事例が増加することで、遺跡の全体像の把握が自然と進むと思われる。しかし、微地形の観察や航空写真からの地形分析など、発掘調査を伴わない調査も行うことで、双方の調査成果を統合して遺跡の内容把握に努め、地元の人たちや教育普及事業に調査成果を還元していきたい。

御岳田遺跡第１次から第８次までの調査成果

［住居跡］	２世紀後半～３世紀初頭	２軒	［周溝墓］	４世紀初頭	１基
	４世紀中頃～５世紀初頭	８軒			
	５世紀中頃	１軒			
	９世紀後半～10世紀前半	15軒（１住・４住）			
	10世紀中頃～後期	１軒			
	11世紀初頭	２軒			
	11世紀後半	６軒			
	12世紀初頭	２軒			
	時代不詳	６軒（２住・３住）			

【引用・参考文献】

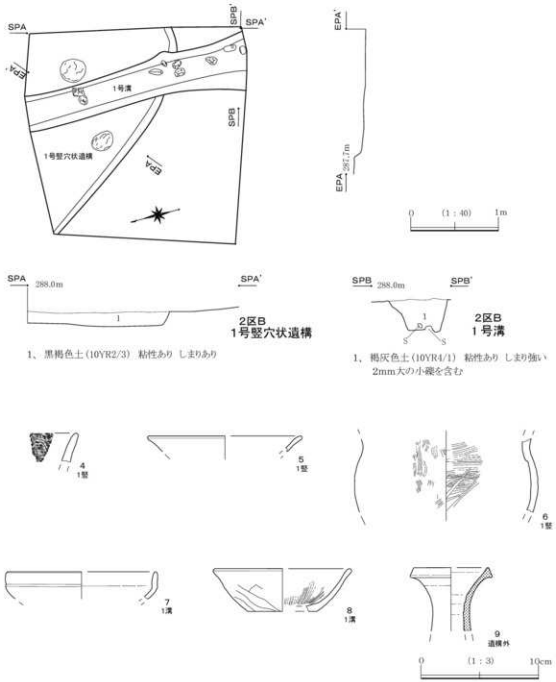
村石眞澄「釜無川流域微地形分析－甲府盆地北西部－」（『信玄堤研究の新展開』山梨県立博物館　2010）
甲府市教育委員会　『秋山氏館跡』甲府市文化財調査報告16　2001
山梨県　『山梨県史　資料編２原始・古代２』　1997
敷島町教育委員会　『御岳田遺跡』敷島町文化財調査報告書　第８集　1999
敷島町教育委員会　『御岳田遺跡Ⅱ』敷島町文化財調査報告書　第22集　2004
甲斐市教育委員会　『御岳田遺跡Ⅳ』甲斐市文化財調査報告書　第11集　2007
甲斐市教育委員会　『御岳田遺跡Ⅴ』甲斐市文化財調査報告書　第21集　2013
甲斐市教育委員会　『御岳田遺跡Ⅵ』甲斐市文化財調査報告書　第22集　2014
甲斐市教育委員会　『御岳田遺跡７』甲斐市文化財調査報告書　第26集　2016



第７図　１区　遺構と遺物

第１表　１区出土遺物観察表

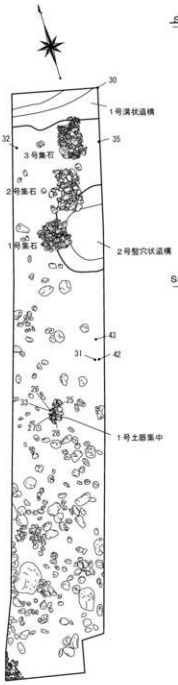
番号	注記番号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
1	E8-1区包含層	土師器(甲斐型)	坏	残3.9	(12.4)	—	明赤褐(2.5YR5/6)	赤色粒子	良好	外面体部手持ちヘラ削り
2	E8-1区包含層	土師器	甕or壺	残4.1	—	—	にぶい褐(7.5YR5/4)	長石・石英・赤色粒子	良	
3	E8-1区一括	土製品	—	最大長2.2	最大幅2.3	最大厚0.7	にぶい褐(7.5YR5/4)	雲母を少量含む	—	碁石状土製品



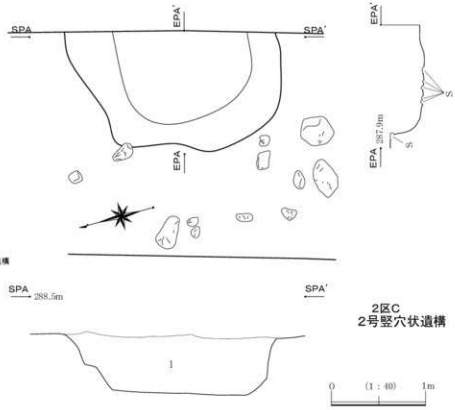
第８図　２区Ｂ　遺構と遺物

第２表　２区Ｂ出土遺物観察表

番号	注記番号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色　調	胎　土	焼成	技法・器形の特徴
4	E8-1タテ	弥生土器	壺or甕	残2.45	—	—	にぶい赤褐(5YR5/4)	長石・石英・雲母	良	外面櫛描波状文
5	E8-1タテ一括	土師器	坏（皿）	残1.35	(13.2)	—	明赤褐(5YR5/6)	キメ細かく緻密　長石・石英・白色粒子	良	焼成やや甘い
6	E8-1タテ一括	土師器	甕	残6.3	—	—	灰褐(7.5YR4/2)	白色粒子を多く含む・長石・金雲母・3mm大の小礫微量	良好	外面ハケ目／内面横位ハケ目
7	E8-1ミゾ一括	土師器	坏	残2.3	(12.6)	—	にぶい橙(7.5YR6/4)	キメ細かく緻密　赤色粒子	良好	
8	E8-1ミゾ一括	土師器（甲斐型）	坏	3.65	(11.5)	(5.9)	橙(5YR6/6)	キメ細かく緻密　赤色粒子・金雲母	良好	外面体部手持ちヘラ削り／内面放射状暗文／全体に摩耗著しい
9	E8-2B4層一括	灰釉陶器	長頸壺	残5.4	(6.4)	—	灰白(2.5Y7/1)	緻密	良好	

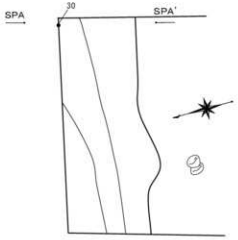


2区C全体図



2区C
2号竪穴状遺構

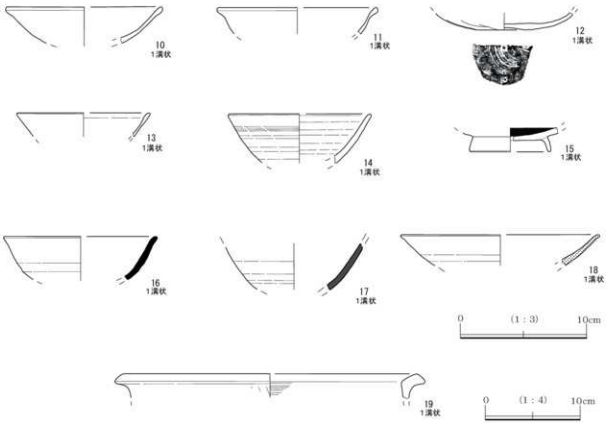
1、黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり しまり強い
4cm大の円礫を少量含む 1cm大の小礫を含む

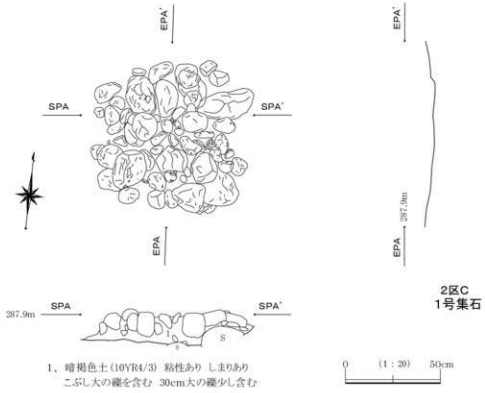


2区C
1号溝状遺構

1、暗褐色土(10YR3/4) 粘性あり しまり強い
2、黒褐色土(10YR3/2) 粘性非常に強い しまり強い
10cm大の小礫を少量含む

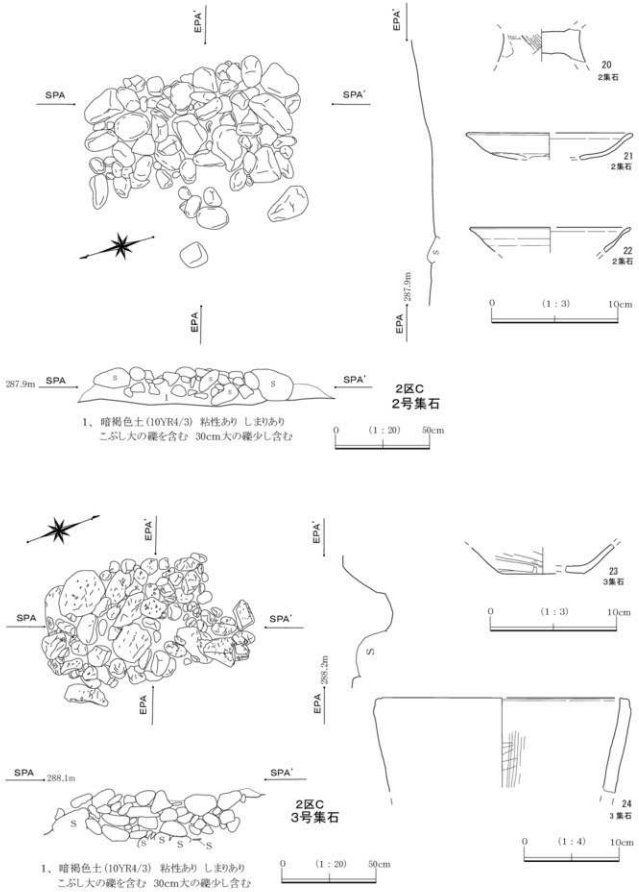
第9図 2区C 遺構と遺物①



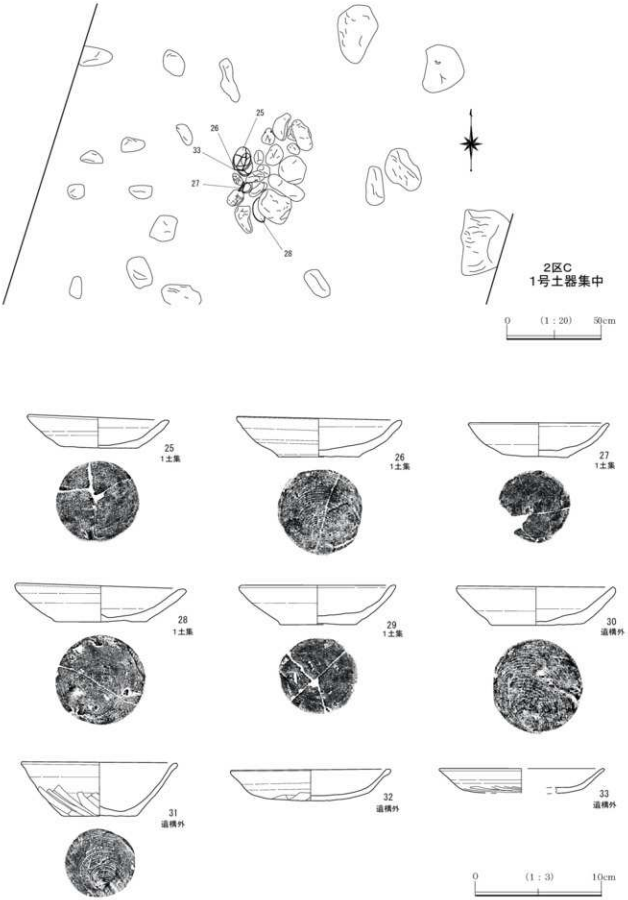


1、暗褐色土(10YR4/3) 粘性あり しまりあり
こぶし大の礫を含む 30cm大の礫少し含む

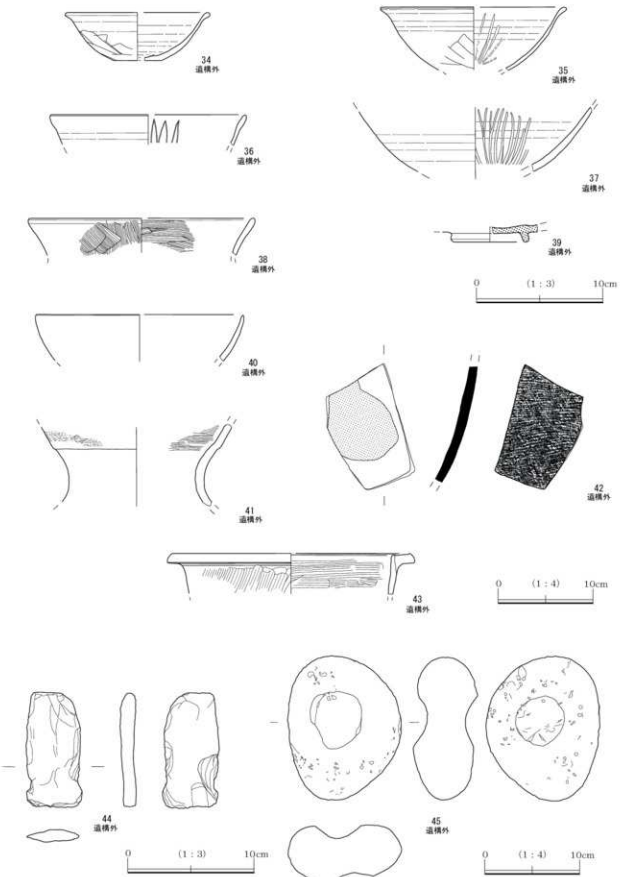
第10図 2区C 遺構と遺物②



第11図 2区C 遺構と遺物③



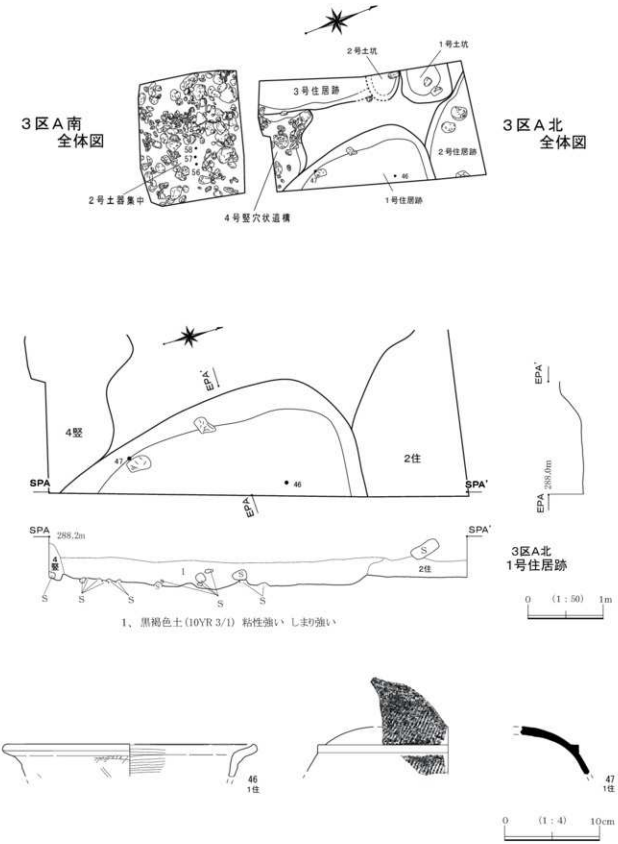
第12図 2区C　遺構と遺物④



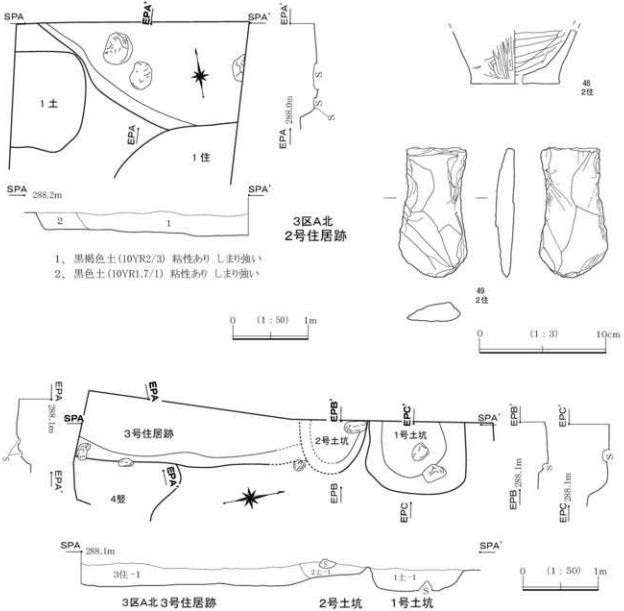
第13図 2区C　出土遺物

第３表　２区Ｃ出土遺物観察表

番号	注記番号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色　調	胎　土	焼成	技法・器形の特徴
10	E8-2C1M状	土師器(甲斐型)	坏	残2.85	(12.3)	—	橙(5YR6/6)	緻密　赤色粒子を多く含む	良	玉縁口縁
11	E8-1M状一括	土師器(甲斐型)	坏	残2.1	(12.4)	—	にぶい赤褐(5YR5/4)	キメ細かく緻密　赤色粒子微量	良好	顕著な玉縁口縁
12	E8-1M状一括	土師器(甲斐型)	皿	残1.35	—	4.5	明赤褐(5YR5/6)	キメ細かく緻密　赤色粒子を含む	良好	外面手持ちヘラ削り、底部糸切り痕、わずかにヘラ調整
13	E8-2C1M状	土師器(甲斐型)	坏	残1.9	(10.4)	—	にぶい赤褐(5YR5/4)	キメ細かく緻密　雲母・赤色粒子	良好	
14	E8-1M状一括	土師器	坏	残3.9	(11.0)	—	にぶい橙(7.5YR6/4)	赤色粒子・長石を少量含む	良好	内外面ロクロナデ、北日摩型の坏か
15	E8-2GX-1M状	土師器	高台付坏	残1.9	—	(6.2)	外面明赤褐(5YR5/6)内面黒褐(2.5Y3/1)	キメ細かく緻密	良好	内黒土器／貼付高台
16	E8-1M状一括	須恵器	坏	残3.4	(12.0)	—	灰(7.5Y4/1)	緻密　長石・白色粒子	良	
17	E8-2C1M状	緑釉陶器	坏	残3.7	—	—	灰オリーブ(7.5Y5/3)	緻密	良好	
18	E8-2C1M状下	灰釉陶器	皿	残2.4	(15.6)	—	灰白(2.5Y7/1)	緻密	良好	
19	E8-1M状一括	土師器	甕	残2.5	(31.0)	—	にぶい黄褐(10YR5/4)	長石・金雲母を多く含む	良	内面横位ハケ目
20	E8-2区C集石2	土師器	—	残2.6	—	—	にぶい赤褐(5YR5/4)	長石・雲母を含む	良	外面斜位ハケ目をわずかに確認
21	E8-2区C集石2	土師器(甲斐型)	皿	残2.15	(12.8)	—	外面橙(5YR6/6)内面橙(7.5YR7/6)	赤色粒子・石英・雲母少量？	良好	外面底部手持ちヘラ削り
22	E8-2区C集石2	土師器(甲斐型)	皿	残2.0	(12.7)	—	橙(7.5YR7/6)	キメやや粗く緻密　雲母・白色粒子	良好	破片やや摩耗
23	E8-2区C集石3	土師器	坏	残2.3	—	(6.5)	にぶい赤褐(5YR5/4)	赤色粒子	良好	回転ヘラ削り
24	E8-2区C集石3	土師器	鉢？	残10.0	—	—	灰白(5Y7/1)	長石・雲母・赤色粒子	良好	全体が摩耗、内面にわずかなハケ目が見られた
25	E8-2区C4層P1	土師質土器	皿	2.6	11.0	6.5	にぶい橙(7.5YR7/4)	キメ細かく緻密　金雲母・赤色粒子	良好	内外面ナデ／底部糸切痕／割れ口摩耗、ほぼ完形
26	E8-2区C4層P2	土師質土器	皿	3.2	13.0	6.4	にぶい橙(7.5YR7/4)	キメ細かい　赤色粒子・金雲母・長石	良好	内外面ナデ／底部糸切痕／割れ口摩耗、ほぼ完形
27	E8-2区C4層P3 E8-2区C4層 E8-2区C土器集中	土師質土器	皿	2.75	10.9	5.2	にぶい黄褐(10YR7/4)	キメやや粗く緻密　金雲母・赤色粒子	良好	内外面ナデ／底部糸切痕／割れ口摩耗
28	E8-2区C4層P4	土師質土器	皿	3.1	13.3	7.2	にぶい橙(7.5YR7/4)	キメ細かく緻密　金雲母・赤色粒子	良好	内外面ナデ／底部糸切痕／割れ口摩耗
29	E8-2区C土器集中	土師質土器	皿	3.1	12.2	6.1	にぶい橙(7.5YR7/4)	キメやや粗く緻密　金雲母・赤色粒子・白色粒子	良好	内外面ナデ／底部糸切痕／割れ口摩耗
30	E8-2区CP11	土師質土器	皿	3.1	12.3	7.3	にぶい橙(7.5YR7/4)	金雲母・5mm大の小礫微量・白色粒子多量	良好	底部糸切痕／完形
31	E8-2区C4層P5	土師器(甲斐型)	坏	4.3	12.3	5.7	にぶい橙(5YR6/4)	キメ細かく緻密　金雲母・赤色粒子	良好	外面体部手持ちヘラ削り／底部糸切痕、内外面口辺部ス痕あり、完形
32	E8-2区C4層P7	土師器(甲斐型)	皿	2.5	12.5	4.7	橙(7.5YR6/6)	キメ細かく緻密　金雲母・赤色粒子	良好	外面体部手持ちヘラ削り／内面剥離著しい
33	E8-2区C4層P2	土師器(甲斐型)	皿	残2.0	(13.0)	—	にぶい赤褐(5YR5/6)	赤色粒子・長石	良好	外面体部手持ちヘラ削り
34	E8-2区北4層一括	土師器(甲斐型)	坏	3.8	(11.0)	(3.8)	橙(5YR6/6)	赤色粒子・長石	良	外面手持ちヘラ削り／内面放射状暗文
35	E8-2区C4層上層P10	土師器(甲斐型)	坏	残5.0	(14.4)	—	橙(5YR6/6)	赤色粒子・長石	良好	口辺部横ナデ(ロクロ)／外面下半斜位手持ちヘラ削り／内面暗文／破片摩耗／暗文摩耗
36	E8-2C4層一括	土師器(甲斐型)	坏	残2.4	(15.5)	—	外面にぶい黄橙(10YR6/4)内面黒(10YR2/1)	キメ細かく緻密、赤色粒子を含む	良好	内黒土器／内面放射状暗文
37	E8-2C-2・3層一括	土師器(甲斐型)	坏	残5.7	—	—	にぶい赤褐(5YR5/4)	緻密　金雲母・赤色粒子少量	良好	内面放射状暗文
38	E8-2C-2・3層一括	土師器	甕	残2.9	(17.7)	—	にぶい褐(7.5YR5/4)	長石・石英・赤色粒子を少量含む	良好	外面縦・斜位ハケ目／内面横位ハケ目
39	E8-2C南4層一括	灰釉陶器	高台付皿	残1.4	—	(6.2)	灰白(10YR7/1)	緻密	良好	
40	E8-2C4層一括	土師器	坏	残5.0	(22.0)	—	黒褐(10YR3/1)	金雲母	良好	内外面ミガキ
41	E8-2C4層一括	弥生土器か	—	残8.2	—	—	明褐(7.5YR5/6)	赤色粒子・長石・全体に摩耗している	良	複合口縁甕、割れ口・器面全て摩耗
42	E8-2区C4層P6	須恵器	甕(転用硯)	残12.7	—	—	黄灰(2.5Y5/1)	長石を多く含む	良好	外面叩き目／転用硯
43	E8-2区C4層下層P9	土師器	甕	残4.3	(25.2)	—	にぶい赤褐(5YR4/3)	長石・石英・金雲母	良好	
44	E8-2C2・3層一括	石製品	打製石斧	最大長9.0	最大幅4.3	最大厚1.1	—	—	—	砂岩製
45	E8-2C4層一括	石製品	凹石	最大長15.3	最大幅12.0	最大厚6.3	—	—	—	玄武岩製



第14図 3区A北 遺構と遺物①



3号住居

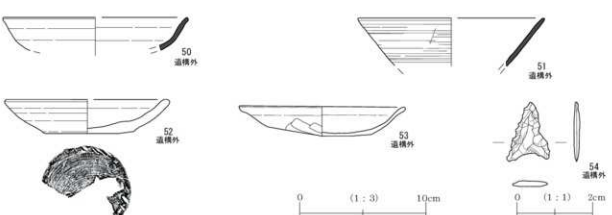
1、黒褐色土(10YR3/1) 粘性あり しまり強い

2号土坑

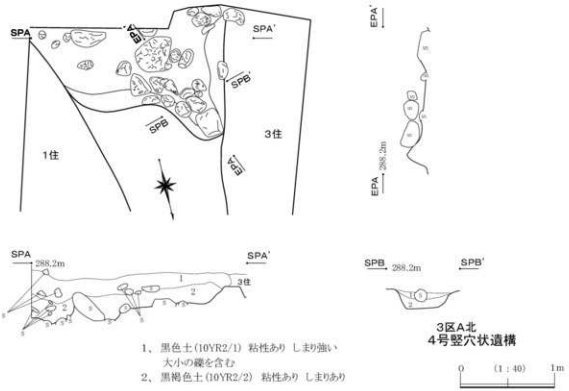
1、黒色土(10YR1.7/1) 粘性あり しまり強い
暗褐色土(10YR3/3)を少量含む

1号土坑

1、黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり しまりあり
4B層と似るが細粒砂を多く含む



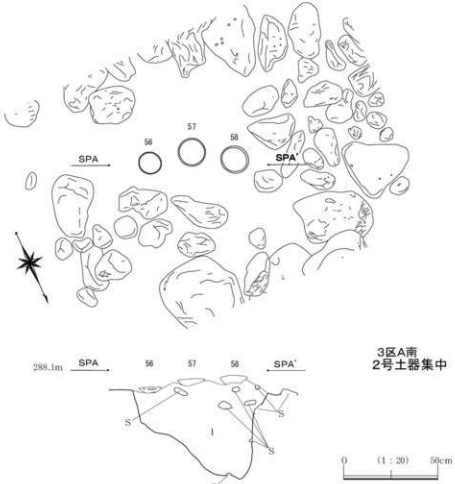
第15図 3区A北 遺構と遺物②



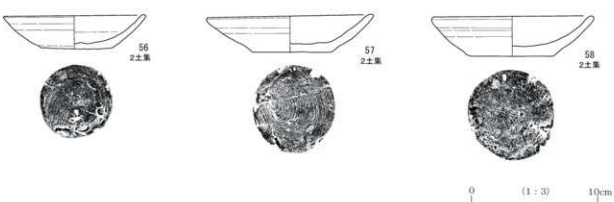
第16図 3区A北 遺構と遺物③

第4表 3区A北出土遺物観察表

番号	注記番号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
46	E8-1住P14	土師器(甲斐型か)	甕	残3.4	(26.2)	—	にぶい褐(7.5YR5/4)	金雲母・長石・石英を多く含む	良	内面横位ハケ目
47	E8-1住P13	須恵器	壺	残5.0	—	—	外面灰(N6/)内面灰(N4/)	長石を多く含む	良好	外面叩き目、内面部分的に剥離、突帯が付く
48	E8-2住一括	土師器	甕	残4.1	—	(6.9)	にぶい黄褐(10YR5/3)	長石・雲母多量・1mm大の白色粒子を含む	良好	外面下半ヘラ調整→縦位ミガキ
49	E8-2住一括	石製品	打製石斧	最大長10.3	最大幅5.3	最大厚1.45	—	—	—	泥岩製
50	E8-3区A北4A	緑釉陶器	皿	残3.0	(14.6)	—	灰オリーブ(7.5Y5/3)	緻密	良好	
51	E8-3区A北4A	緑釉陶器	坏	残3.8	(14.8)	—	灰オリーブ(7.5Y5/2)	緻密	良好	
52	Eシクツ-TR北一括	土師質土器	皿	2.7	(12.8)	(7.0)	橙(5YR7/6)	キメ細かく緻密 赤色粒子・金雲母	良好	底部糸切痕かつキザミ状の調整痕あり
53	Eシクツ-TR中央一括	土師器(甲斐型)	皿	2.3	12.9	5.0	明赤褐(5YR5/6)	キメ細かく緻密 金雲母・赤色粒子	良好	外面体部回転ヘラ削り／底部ヘラ削り調整
54	E8-3区A北一括	石製品	石鏃	最大長1.55	最大幅1.1	最大厚0.1	—	—	—	
55	E8-4タテ一括	縄文土器	深鉢	残6.6	—	—	にぶい黄褐(10YR5/4)	金雲母・小礫	良好	前期後半(諸磯)



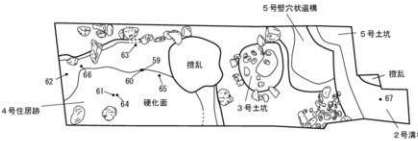
1、黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり しまりややあり 1cm大の小礫をわずかに含む



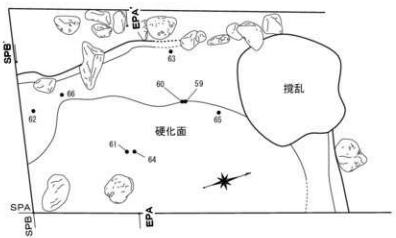
第17図　3区A南　遺構と遺物

第5表　3区A南出土遺物観察表

番号	注記番号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
56	E8-3区A南土器集中P16	土師質土器	皿	2.7	11.2	6.0	橙(7.5YR7/6)	キメ細かく緻密　金雲母・赤色粒子	良好	内外面ナデ／底部糸切痕
57	E8-3区A南土器集中P17	土師質土器	皿	3.0	13.0	6.8	にぶい橙(7.5YR7/4)	キメ細かく緻密　金雲母・赤色粒子	良好	内外面ナデ／底部糸切痕
58	E8-3区A南土器集中P18	土師質土器	皿	3.2	12.6	7.1	にぶい橙(7.5YR7/4)	キメ細かく緻密　金雲母・赤色粒子	良好	内外面ナデ／底部糸切痕



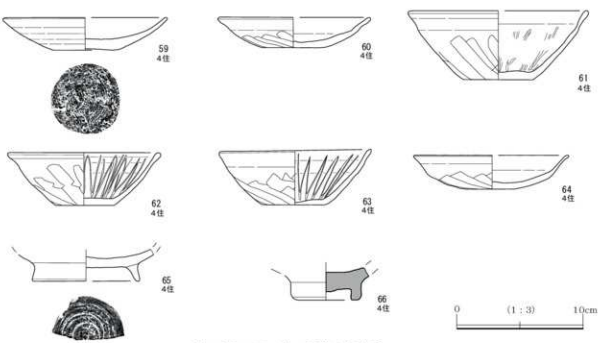
3区B北
全体図



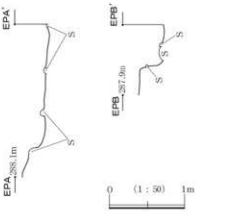
1、黒褐色土(10YR2/2) 粘性あり しまりとても強い
5cm大の礫をわずかに含む

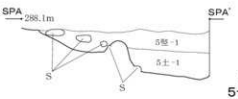
3区B北
4号住居跡

0 (1：50) 1m

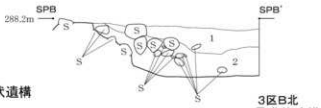


第18図 3区B北 遺構と遺物①





3区B北
5号竪穴状遺構
5号土坑



3区B北
2号溝状遺構

5号竪穴状遺構

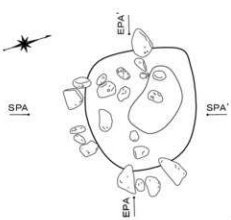
1、暗褐色土(10YR3/4) 粘性あり しまりあり
　2～3cm大の円礫を含む
　5～ 10cm大の円礫をわずかに含む

5号土坑

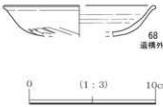
1、黒褐色土(10YR2/3) 粘性あり しまりあり
　2～3cm大の礫を含む

2号溝状遺構

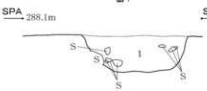
1、黒褐色土(10YR2/2) 粘性非常に強い しまり強い
　1～5cm大の円礫を少量含む
2、黒褐色土(10YR2/3) 粘性非常に強い しまり強い
　15 ～ 20cm大の円礫を少量含む
　1～5cm大の円礫を少量含む



67
2溝状



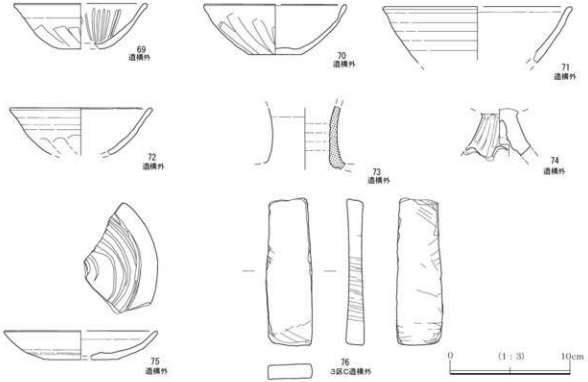
68
遺構外



3区B北
3号土坑

1、黒褐色土(10YR3/2) 粘性あり しまり強い
　1～2cm大の小礫を含む

第19図 3区B北　遺構と遺物②



第20図 ３区Ｂ北・３区Ｃ　出土遺物

第６表　３区Ｂ北出土遺物観察表

番号	注記番号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
59	E8-4住P29	土師器	皿	2.6	(12.7)	5.0	灰白(10YR8/2)	キメやや粗い	良	口辺部横ナデ／底部糸切痕／破片摩耗著しい
60	E8-3区B4下層P19 E8-3区B4下層中央～南	土師器(甲斐型)	皿	2.4	(11.9)	5.0	明赤褐(5YR5/6)	キメ細かく緻密　赤色粒子を含む	良好	外面体部回転ヘラ削り
61	E8-3区B4下層P22 E8-3区B4A下層一括 E8-3B一括	土師器(甲斐型)	坏	5.5	14.0	5.5	にぶい赤褐(5YR5/4)	赤色粒子・長石	良好	外面体部回転ヘラ削り／内面暗文摩耗著しい
62	E8-3区BP26	土師器(甲斐型)	坏	4.2	12.0	4.7	橙(5YR6/6)	キメ細かく緻密　赤色粒子・金雲母	良好	外面体部回転ヘラ削り／内面放射状暗文
63	E8-3区B4A下層P23	土師器(甲斐型)	坏	4.4	12.0	5.0	橙(5YR6/6)	キメ細かく緻密　金雲母および赤色粒子少量	良好	外面体部回転ヘラ削り／内面放射状暗文
64	E8-4住P27	土師器(甲斐型)	皿	2.7	(12.2)	4.0	橙(2.5YR6/6)	キメ細かく緻密　金雲母・赤色粒子	良好	外面体部下半回転ヘラ削り
65	E8-3区B4下層P21	土師器	高台付坏	残2.5	－	8.4	橙(7.5YR6/6)	キメ細かく緻密　砂粒を多く含む	良好	
66	E8-3区B4A下層P20	青磁	高台付(腰)	(2.4)	－	5.6	オリーブ灰(2.5GY6/1)	キメ細かく緻密	良好	
67	E8-3区Bおちこみ P28	土師質土器	柱状高台付坏	残4.8	－	5.5	にぶい橙(5YR6/4)	金雲母・長石	良	外面横位ハケ目／底部糸切痕
68	E8-3B4A下層中央より E8-3B4B中央～南一括	土師器	皿	残2.4	(11.8)	－	明赤褐(5YR5/6)	赤色粒子・長石	良好	口辺部横ナデ／外面下半斜位ハケ目ア／手持ちヘラ削り
69	E8-3B4A下層一括	土師器(甲斐型)	坏	3.8	(10.8)	－	明赤褐(5YR5/6)	キメ細かく緻密　金雲母　赤色粒子を含む	良好	外面体部手持ちヘラ削り／内面放射状暗文
70	E8-3B-4A下層一括	土師器(甲斐型)	坏	4.2	(11.8)	(4.4)	にぶい褐(7.5YR5/4)	キメやや粗い　赤色粒子	良好	外面体部手持ちヘラ削り
71	E8-3B4A下層一括	土師器	坏	残5.1	(15.4)	－	外面灰黄褐(10YR4/2) 内面にぶい褐(7.5YR5/4)	赤色粒子と雲母を少量含む	良	外面ヘラナデ、北目摩型土師器か
72	E8-3B4A下層一括	土師器	坏	残3.9	(11.5)	－	にぶい黄橙(10YR6/4)	赤色粒子・長石	良	外面体部手持ちヘラ削り／内面暗文、摩耗してほぼ見えず
73	E8-3区B4A井戸～南	灰釉陶器	短頸壺	残5.2	－	－	灰オリーブ(7.5Y6/2)	緻密	良好	
74	E8-3B4A南一括	土師器	高坏(脚部)	残4.0	－	－	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	長石・黒雲母多量を含む	良	脚部外面縦位ミガキ／内面指頭痕あり
75	E8-3B一括	土師器(甲斐型)	皿	2.4	12.8	－	橙(5YR6/6)	キメ細かく緻密　金雲母・赤色粒子	良好	内面渦巻状暗文

第７表　３区Ｃ出土遺物観察表

番号	注記番号	器種	器形	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成	技法・器形の特徴
76	E8-3C地下85cm	石製品	砥石	最大長12.2	最大幅3.8	最大厚1.5	－	－	－	砂岩製

写 真 図 版

１区　完掘（南から）

１区　調査前風景（南から）

１区　３号竪穴状遺構　完掘（南から）

１区　調査風景

１区東壁　土層堆積状況

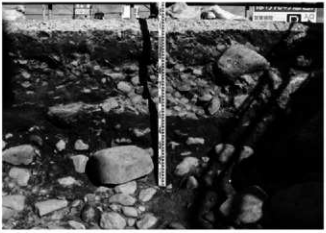
図版２　２区Ａ

２区Ａ　完掘（南から）

２区　調査前風景（南から）

２区Ａ　調査風景

２区Ａ南壁　土層堆積状況



２区Ａ北壁　土層堆積状況

２区Ｂ　完掘（北から）

２区Ｂ　遺構検出状況（北から）

２区Ｂ　１号溝　完掘（北から）

２区Ｂ東壁　土層堆積状況

２区Ｂ　調査風景

図版４　２区Ｃ①

２区Ｃ　完掘（南から）

２区Ｃ　調査区周辺の様子（北から）

2区C　2号竪穴状遺構　完掘（西から）

2区C　1号溝状遺構　完掘（西から）

2区C　1号集石　検出（南西から）

2区C　2号集石　検出（南西から）

2区C　3号集石　検出（南西から）

2区C　1号土器集中　出土状況

2区C　土器（42・31）出土状況（北から）

2区C　調査風景

図版６　３区Ａ北①

３区Ａ北　完掘（西から）

３区Ａ北　完掘(南から)

３区Ａ　調査前風景

３区Ａ北　１号住居跡　完掘（西から）

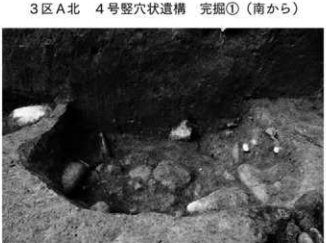
３区Ａ北　１号住居跡　完掘（北から）

３区Ａ北　２号住居跡　完掘（南西から）

３区Ａ北　３号住居跡　完掘（北から）

３区Ａ北　４号竪穴状遺構　完掘①（南から）

３区Ａ北　４号竪穴状遺構　完掘②（南から）



３区Ａ北　１号土坑　完掘（東から）

図版８　３区Ａ南

３区Ａ南　完掘（西から）

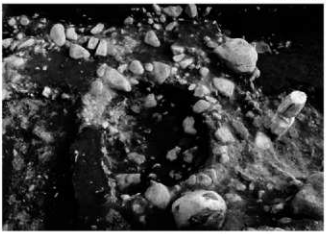
３区Ａ南　２号土器集中　出土状況（西から）

３区Ａ南　２号土器集中　完掘（北東から）

３区Ａ南　調査風景

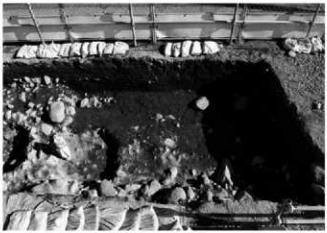
３区Ａ南 南壁　土層堆積状況

3区B　調査前風景（南から）



3区B北　3号土坑　完掘（西から）

3区B北　4号住居跡　完掘（北から）



3区B北　4号住居跡　完掘（西から）

3区B北　完掘（北から）

図版 10　3区B南・3区C

3区B南・3区C　調査前風景（北から）

3区B南　調査風景

3区B南　完掘（北から）

3区C　調査風景

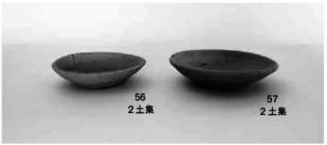
3区C　完掘（北から）

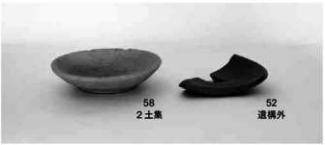
25
1土集
26
1土集

27
1土集
28
1土集

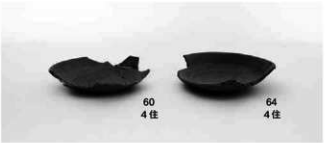
29
1土集
32
遺構外

30
遺構外
31
遺構外


56
2土集
57
2土集


58
2土集
52
遺構外

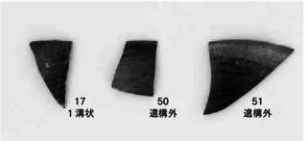
59
4住

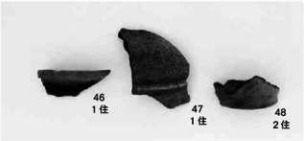

60
4住
64
4住

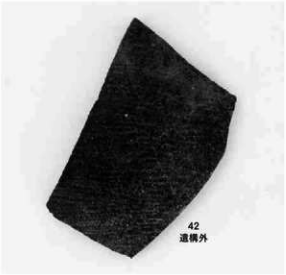
62
4住
63
4住
61
4住

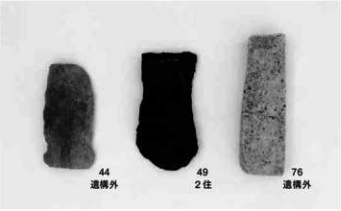
図版 12　出土遺物

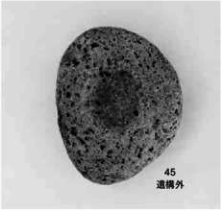
66
4住


17
1溝状
50
遺構外
51
遺構外


46
1住
47
1住
48
2住


42
遺構外


44
遺構外
49
2住
76
遺構外


45
遺構外

報　告　書　抄　録

ふりがな	みたけだいせき
書名	御岳田遺跡8
副書名	都市計画道路田富敷島線道路改良工事に伴う平安時代等の発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲斐市文化財調査報告書
シリーズ番号	28
編著者名	長谷川 哲也
編集機関	甲斐市教育委員会
所在地	〒400－0192　山梨県甲斐市篠原2610
発行年月日	平成30年［西暦2018年］3月16日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘 調査期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
みたけだいせき 御岳田遺跡	山梨県甲斐市 大下条地内	19210	敷－6	35度40分 29秒	138度31 分24秒	平成28年 11月14日 ～ 平成29年 2月17日	450㎡	県道拡幅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御岳田遺跡	集落跡 旧河道	平安 中世	住居跡 溝跡 土　坑	土師器 土師質土器	旧河道の礫中に住居を建てるなど、水際の土地利用形態がうかがえた。

甲斐市文化財調査報告　第28集

御　岳　田　遺　跡　8

発行日　平成30年（2018）3月16日
発　行　甲斐市教育委員会
山梨県甲斐市篠原2610
TEL（055）278－1697
印　刷　株式会社　少　國　民　社